For の意味論再考[1]

The Semantics of *For* Revisited

花　﨑　美　紀*・花　﨑　一　夫**

キーワード：多義，前置詞，慣用表現

0．Introduction

前置詞は，認知言語学の台頭以前は「機能語」に区分され，「内容語」と違い，名の通り機能のみをもち，固有の意味はないとされてきた。しかし，すべての語には意味があるとする認知言語学の台頭とともに，その理論を証明する牙城として，前置詞は，Brugman（1981）以降，研究され始め，その研究は確実な進歩を遂げつつあり，前置詞は，非常に多義であることが明らかになってきた。前置詞 *for* も例外ではなく，非常に多義である。木下（1995）では12，Lindstromberg（1998[1997]）では16，Cobuild では37もの意味が設定されている。それらの意味も，"One form, one meaning" を標榜する，iconicity（Bolinger 1977）の視点から言えば，一つの中心義に集約されうるはずである。しかしながら，*for* の意味の中には，次の用法のように，他の用法に関係付けることが難しいものがある。

（1）　a．［方向］John left for Tokyo today.
　　b．［スパン］John has been in Tokyo for three months.
　　Go straight for a mile.
（2）　a．But for your help, I couldn't have done it.
　　b．For all his riches he's not happy.　　（新英和中辞典）

（1）のような用法は，生産的ではあるけれども他の用法とは関連付けられない。このような用法を「孤立用法」と呼ぶことにする。また（2）は（ⅰ）特定の単語との組み合わせで現れ，また（ⅱ）常に同じ文中の位置で現れる，という特徴を持った表現であり，このような特徴を持つ用法を「慣用用法」と呼ぶことにする。

前置詞研究は，このような「孤立用法」や「慣用用法」をも包括するような理論でなくてはならない。前置詞や助詞等の意味を考える際，このような「孤立用法」等を「例外」と見なして取り上げない，あるいは，その語の一部の用法だけを対象とすることは望ましいこと

---

[1] 本論文は，加藤＆花崎（2005，2006）をもとに再考したものである。

* 信州大学人文学部准教授
** 信州大学全学教育機構准教授

ではない。一部の用法だけを考察することに意味がないというわけではなく，洞察的な成果をあげることはもちろん可能であろう。ただ，そのような研究では，まさに一部の意味を研究したのであって，当該語の意味を考察したことにはならない点に注意すべきである。本研究では，このような「孤立用法」や「慣用用法」こそが当該語の意味を明らかにする近道であると主張する。すなわち，以下を本論は主張するものである。

（3） 機能語の多義性研究の課題
- a．観察される全ての意味・用法の分類・記述
- b．各用法間の関係付け
- c．共通点を軸としたネットワークの構築
- d．ネットワークに入らない「孤立用法」の特定
- e．熟語または準熟語としてしか用いられない「慣用用法」の特定
- f．「孤立用法」と「慣用用法」の存在の説明
- g．近隣語との守備範囲の設定

1．先行研究

1.1. 前置詞の多義に対する，僅少な先行研究

序論でも述べたとおり，前置詞研究は，すべての語には意味があると謳う認知言語学の理論を主張する牙城として，認知言語学の台頭とともに注目を浴び始めているものの，まだまだ，先行研究がたくさんあるとは言えない。この件は，Hanazaki（2005）でも明らかにしている点である。

> Polysemy has received surprisingly little attention in semantics as linguists have often assumed that lexical forms are conventionally paired with meanings. The polysemy of prepositions has received even less attention, probably due to the fact that prepositions were considered as function words, not content ones. As Tyler & Evans (2003: 1) point out, there are so few studies on the polysemy of prepositions that we can almost say the phenomenon has been ignored. (Hanazaki (2005: 413))

1.2. *For* の先行研究

数少ない前置詞研究も，Brugman（1981）が取り上げたことから議論が広がった *over* など，一部の前置詞に集中しており，*for* などそれら特定の前置詞以外の前置詞研究は非常に少ない。それらの数少ない先行研究は，２つの流れに集約できよう。つまり，統語意味論的な研究と，認知意味論的な研究の２つである。

1.2.1. 統語意味論的な見地からの先行研究

この流れに区分できるのは，ブレント（1997），Farrell（2005），松原（1999）などである。これらの先行研究は，Rauh（2002）がまとめる通り，多義は恣意的なものであり，そ

の語がもつ property として処理される。

> Linguists in this tradition barely recognize the polysemous nature of prepositions, and when they do, they assume that the relationships between the distinct meanings associated with a single form are arbitrary and argue that these form-meaning pairings are stored in the mental dictionary or lexicon. In other words, they argue that the structure and meaning of prepositions can be explained in terms of the prepositions' different lexical properties (Rauh (2002)). (Hanazaki (2005: 413))

1. 2 . 2.　認知意味論的見地からの先行研究

他方，認知意味論的見地からの先行研究に区分されるのは， Wood（1967），Hill（1969），Givon（1984），Heine, Claudi & Hunnemeyer（1991），中 右（1994），木 下（1995），高 木（1997，1999），Lindstromberg（1998[1997]），宮　前（1998），Yamaguchi（2002），Tyler & Evans（2003），田　口（2004），大　西（2005[1996]），Coventry，Cangelosi，Rajapakse, Bacon，Newstead，Joyce & Richards（2005），Burigo & Coventry（2005），Thora（2005）などである。

これらは，中核的な意味用法を定め，それの派生として，様々な意味用法を位置づけているものである。

1. 3.　先行研究の問題点

統語意味論的な説明は，多くの意味は恣意的であり，意味間の関係はないものとするため，一つの語の多数の意味は列挙されるにとどまる。これでは，語学の学習者にとっては記憶する意味が増え英語教育の一助とならないばかりか，なぜそのように多義になったのかについての根本的な問いには答えていないことになる。

また，本稿では，これまでの認知意味論的な説明は，以下の 4 点において不備であると主張する。すなわち，１点目として，それらの多くは包括的な説明ではなく，２点目として中核となる意味の設定に問題があり，３点目として，多義の意味の同定に問題があり，４点目として，際限ない意味の広がりを阻止することはできない　という 4 点である。

１点目の非包括的な説明を行っていないという点は，例えば高木（1997）の論文のタイトル「＜ for ＋数表示金額＞型と＜ at ＋量表示価格＞型における前置詞の互換性（Ⅰ）」を見ても明らかである。序論で述べたとおり，前置詞や助詞等の意味を考える際，その語の一部の用法だけを対象とすること，あるいは，（１）や（２）のような「孤立用法」等を扱わないことは望ましいことではない。繰り返すと，一部の用法だけを考察することは，まさに一部の意味を研究したのであって，当該語の意味を考察したことにはならないのである。本研究では，このような「孤立用法」や「慣用用法」こそが当該語の意味を明らかにする近道であると主張する。

以下，先行研究の不備と思われる残りの 3 点について，一つずつ概観することとする。

1. 3 . 1. 様々な Suggested proto-type / image-schema

序論にも述べたとおり，認知意味論的な見地からの多義語研究は，iconicity の原則に従い，中核的な意味を求め，他の用法をその中核的な意義からの派生と見るわけであるが，先行研究は，何を中核的な意味に据えるかということで3つに分類できよう。一つは，木下（1995）や宮前（1998）や Tyler and Evans（2003），そして加藤＆花崎（2006）に代表されるように＜前＞と設定するもの，２つめは，大西（2005[1996]）に代表されるように，＜前＞になんらかの動きを足すモノ，そして３つめが Lindstromberg（1998[1997]）に代表されるように，*for* は高度に機能化されているとして，固有な意味を認めないものである。

＜前＞という意味は，ほとんどの先行研究がを中核的意味として設定するものである。下の Tyler and Evans（2003）では，*to* も *for* も方向をもって「前」を表すが，その違いは *for* の方が目的が曖昧であると述べている。実際に，加藤＆花崎（2006）でも，中心義は＜前＞であると結論づけた。しかし，このように設定すると，例えば(1b)のような＜期間＞を表す用法の説明が困難である。加藤＆花崎（2006）では，この用法は，フランス語の *pour* からの借入によると結論づけたが，なぜ *pour* の多義の中でこの用法だけが借入されたのかという問いには，答えるにいたらなかった。

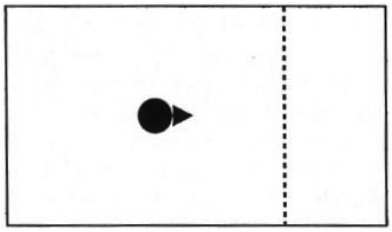

図１．Tyler and Evans（2003）による *for* の proto-scene

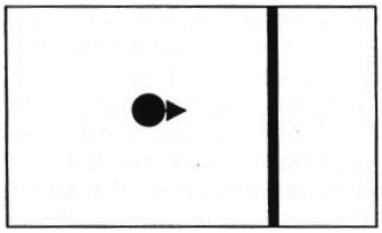

図２．Tyler and Evans （2003）による *to* の proto-scene

以下は，２つめの流れ，つまり，＜前＞＋なんらかの動きとする研究が論じる *for* の中核的意味のイメージスキーマである。

図３．大西（2005[1996]）による *for* / *to* のイメージスキーマ

大西（2005）によると，*to* も *for* も動きを表すが，*to* の方がその道程がしっかり認識されるが，*for* はその道程が曖昧であると述べられている。ところが，やはり，このような中心義を設定しても，（１）（２）のような「孤立用法」などは説明できない。たとえば，以下の例文において，

（２ａ） but for you help

TR がLM である *your help* に向かっているという説明は，この用法をうまく説明しているとは言えないであろう[2]。

そして，３つめの流れは，Lindstromberg（1998[1997]）に代表されるように，*for* の意味があまりにも多岐にわたるため，*for* は高度に機能化されているとするものである。Lindstromberg（10998[1997]）は，*for* の意味は，ただのある種のマーカーであるとしている。

> *For* does not characterize a spatial relationship … However, *for* does have one meaning which seems a good candidate for "best example" that is *This piece of cake is for Jane* … *For* has … ear-marking meaning (Lindstromberg 1998 [1997]: 221)

しかし，ear-marking meaning であるとするなら，*so* や *as* との意味の差は説明できないために，iconicity の理論に反する。

この２番目の，中核となる意味に問題があるという問題点は，すべての用法，特に本稿が「孤立用法」や「慣用用法」と呼ぶところの（１）（２）のような用法を，扱っていないことが原因であると言えよう。包括的な説明であるためには，（３）で述べたような研究が必須であると言うことを示唆していると言えよう。

1. 3. 2. 意味の同定

上述した先行研究がかかえる３点目の問題として，*for* の意味の同定の問題が挙げられよう。たくさんの意味を持っている *for* にいくつの意味を認めるかが，先行研究によって大きく異なる。木下（1995）は12個の意味，Lindstromberg（1998[1997]）は16個の意味，辞書では，Cobuild は37個の意味，リーダーズは７つの意味を認めている。

このように各研究によっていくつの意味を認めるかが大きく違うことがわかる。この問題を解決するためには，明確な，意味同定プロセスが必要といえよう。

1. 3. 3. 際限ない意味拡張

そして，問題点の４点目として，認知意味論的な研究で多用される，Wittgenstein（1953）の家族的類似性を元にした，メトニミーやメタファーによる意味拡張への説明は，際限ない意味拡張を阻止することができないという欠点を孕んでいる。これは，Hanazaki（2005）で明らかにしたところである。

> Most earlier studies on polysemy assumed that the senses in the radial category are related through metaphor and metonymy (Lakoff (1987)). Taylor (1993), who lists eight

[2] 本稿を書き上げた後に，*for* の中核意義を「交換」であるとする森山他（2010）を見つけたが，「交換」という中心義を設定したとしても，（１）（２）の様な孤立用法や慣用用法は説明できないという点においては，他の３つの流れと同じように欠陥があると言えよう。一言付け加えるなら，この「交換」を中心義とする説では，*leave for London* などのような基本的な用法も説明できない。

possible processes of polysemization, also follows this line of thought: all of his processes are triggered by the change in the domain, hence metaphor. In practice, there are two major problems with this approach: it provides such an unconstrained semantic network that the model allows any other preposition or any other sense to be related to the polysemous network of the word in question, and it offers no explanation for why some possible extensions have not occurred. (Hanazaki 2005: 425)

次の章からは，上の４つの問題点を解決することができるような意味説明を行うこととする。

２．理論的枠組み　方法論

本章では，前章でみた先行研究の概観から割り出した，前置詞研究が目指さなくてはならない４点，すなわち（ａ）全用法を扱わなくてはならない　（ｂ）中核的意味を求め直す必要がある　（ｃ）意味の同定のプロセスを明確にしなくてはならない　（ｄ）際限ない意味の拡張を防ぐ理論を立てなくてはならない，という４点をカバーするために，以下の４点を提唱する。

（４）　本稿が提唱する具体的な方法論

（Ａ）　Lagnacker（1987）が提唱するところの Bottom-to-top 方式をとり，現在使われているすべての用法を網羅するよう努める（（ａ）に対応）

（Ｂ）　前置詞固有の意味をとらえるべく on-line construction of meaning（文の意味は単語の意味の総和ではなく，単語と単語の結びつきから，単語が固有にもつ意味以上の意味をもつことがある）を認める（（ｂ，ｃ）に対応）

（Ｃ）　意味の同定の明確な方法を明示する（（ｃ）に対応）

（Ｄ）　語の意味は，各語が固有に持っている意味を見る，Semasiological な研究だけでは足りず，近似語の意味を見ることが必要であり，つまり，Onomasiological な視点が必要であり，近似義語が意味の拡張を阻止すると動的に考える。

次に，具体的に，Ａから Ｄを説明する。

2. 1.　具体的データから検証する

本論では，すべての意味用法を網羅することを目的に，現在使われている意味用法を調べるために，BNC[3] と COCA[4] を使い，*for* を含む500例を検証した。

2. 2.　On-Line Construction of Meaning

前置詞の意味を考える際には，前置詞固有の意味が何であるかを同定しなくてはならない。ところがこれまでの多くの先行研究は，前置詞固有の意味を扱っていないと思われる研究が

[3] BNC = British National Corpus

[4] COCA = Corpus of Contemporary American English

数多くある。

たとえば，Brugman（1981）は，次の（5）（6）の *over* について，（5）の *over* は動的な意味を，（6）の *over* は静的な意味を持っていると分析している。

（5） The plane flew over the city
（6） Hang the painting over the fireplace. （Brugman1981）

しかし，この動的・静的な意味の違いは，各文において使われている動詞，具体的には，*fly* と *hang* がもつ動的・静的な意味をも含んでしまっているということができよう。

つまり，前置詞固有の意味を認めるためには，文の意味は単語の意味の総和ではなく，単語と単語の結びつきから，単語が固有にもつ意味以上の意味をもつことがあることを認め，Tyler and Evans（2003）がいうところの，on-line construction of meaning を認める必要があると言えるであろう。

同様のことは，Hanazaki（2005）でも述べたことである。

> ... previous studies on polysemy, such as Brugman (1981, 1988) and Lakoff (1987), adopt what Jackendoff calls (1997: 48) "simple compositional" approach, wherein "all elements of content in the meaning of a sentence" are provided by the lexical items and the syntactic configuration in which they occur. Tyler & Evans, on the other hand, advance the concept of on-line contextually determined interpretations and argue that lexical entries serve as mere prompts for meaning construction, which involves elaboration and integration of linguistic and non-linguistic information. For example, they argue that the trajectory of the cat in the cat jumped over the wall is derived not only from the meaning of the word over, but also from the embodied information of cat, jump, and wall. (Hanazaki (2005: 414-415))

2. 2. 意味の同定（Hanazaki（2005），Tyler & Evans（2003））

各例文における，前置詞 *for* の固有の意味を確定した後は，どの意味用法が同じ用法と呼べるのか，意味の同定が行われなくてはならない。その作業のガイドラインとして，本稿は Tyler and Evans（2003）の提案を採用する。（8）に続く例文と意味の認定は Tyler and Evans のものである。筆者らは（7）から(10)の分析をそのまま首肯するものではないが，ここでは例示のために原著者の例をそのまま引用する[5]。

---

[5] 例えば(10)の *over* は（8）のものと意味が違うと Tyler and Evans は主張しているが，それには疑問の余地がある。*Over* の基本的意味を「超えている」と考えれば，（8）（9）は「垂直方向に超えている」のであり，一方(10)では「水平方向に越えている」と考えることができる。（8）から(10)で *over* がそのような意味になるのは，*over* 自身の責任ではなく，TR・LM・動詞の意味などから決定されていると考えることがもしできれば，（8）から(10)の *over* 自身は同じ意味であるとする議論をすることも可能である。本稿では，そのような方向を意識しながらも，次節以降で見る *for* の意味の同定に関しては（7）の方式に従った。紙幅の都合もあり，ここで示唆した方向は本稿では踏み込まず，今後の課題としたい。

（７） 意味同定のガイドライン

［１］ abstract away the spatial relation of Trajector (henceforth TR) and Landmark (henceforth LM) of one sense A

［２］ combine that resulting schema with the other information, both linguistic and extra-linguistic, in sentence that contains B. If the meaning of the sentence can be inferred, B is not a distinct sense, and if not, a distinct sense.

（８） ａ. The picture is over the mantel.
ｂ. *over* : TR being higher than LM

（９） ａ. The rabbit hopped over the fence.
ｂ. The rabbit hopped <*TR being higher than LM*> the fence

（10） ａ. Arlington is over the Potomac River from Georgetown.
ｂ. *Arlington is <*TR being higher than LM*> the Potomac River from Georgetown

（８ａ）の *over* は（８ｂ）のような意味を持つ。（９ａ）の *over* には，（９ｂ）のように（８ｂ）で認定した意味を代入しても意味は変わらない。そのため，（８）と（９）の *over* は同じ意味であると認定される。一方，（10ａ）の *over* に（８ｂ）の意味を代入することはできない。そのため，（10）の *over* は（８）のものとは別の用法であると認定される。

次章では *for* の諸用法を見ていくことになるが，そこで認定されている意味は（７）のガイドラインに従って同定したものである。

2. 3. 意味拡張を制限するシステムとしての Onomasiological Approach

どんな２つの事物の間にも類似性は認められるため，メタファーやメトニミーによって意味拡張を説明すると，際限なく意味が広がってしまう。つまり，何らかの意味拡張を阻止するプログラムが必要である。例えば，*over* は＜ ABOVE + CROSS ＞と Brugman（1981）では議論されているが，（11）のような用例は存在しないわけである。

（11） The forehead is *over / above the eye.

「額」は幅があるため「目」の＜ ABOVE+ACROSS ＞であると言えるが，（11）において *over* は非文となってしまう。つまり，メタファーやメトニミーによってのみ意味拡張を説明するだけでは足りず，意味拡張を制限するシステムが必要なのである。

本稿では，近似義語が，意味の拡張を阻止しており，その拡張を阻止されたものは，慣用表現として残ると主張するものである。

これは，Dirven andVerspoor（2003[1998]）が主張する Onomasiological approach を動的なシステムとして応用するものである。Dirven and Verspoor（2003[1998]）は，Onomasiological approach を以下のように説明する。

Semasiology (from Greek *sêma* 'sign') is … an approach to the lexicon which describes

the polysemy of a word form and the relationship between these various senses. … In onomasiology we start from a concept … and see which other words or expressions we can use as synonyms to denote the same or similar concepts … [T]he choice for a lexical item as a name for a particular referent is determined both by semasiological and onomasiological salience. This recognition points the way towards a fully integrated conception of lexicology, in which both semasiological and onomasiological approaches are systematically combined. (Dirven and Verspoor eds. 2003: 26-45)

Hanazaki and Kato（2003，2004）はそのような研究プログラムに沿ったものとして位置づけられる。そこでは *by* を対象に考察した。*By* の現在での中核的意味は「経由」であると考えられる。*By* のほとんどの用法は「経由」を中核とするネットワーク内で位置づけられるが，*by day*，*by night* という熟語表現は，*by* の他の用法に結び付けられない。しかし古英語期の状況を調べると，当時の *by* の中核的意味は「辺り」であり，それを時間領域に写像したものがこの用法である。空間的「辺り」がその後失われ，よってその時間用法であった *by day* は他の用法と切り離され，熟語としてのみ生き残った。以上がこの研究の，孤立した用法に関する主張の概要である。

この *by* の研究は，見方を変えれば，前置詞研究における歴史的考察の必要性を訴えるものとして見ることができる。まず現代語における意味分布を概観する。そこで他の用法に結び付けられない孤立用法や熟語用法が見られる場合，それらの存在は，それらの孤立した用法をかつてはネットワーク全体に結び付けていた「失われた用法」の存在を暗示するものとして受け取られることになる。そこで当該語の過去の用法を調査していくことになる。このように，孤立した用法も含めて意味ネットワーク全体を考察するには，歴史的アプローチを取ることが不可欠である。

3．*For* の意味

本章では具体的に２章で提示された方法論，つまり（１）を念頭においた（４）の方法論を用いて，*for* の多義を検証する。

3. 1. データ　および意味の同定

この研究のために，BNC（British National Corpus）および COCA（Corpus of Contemporary American English）から *for* を含む500例を分析した。それを前章の（７）の方式で分類した結果が(12)である。

(12)　*For* の意味

a．	方向	<in the direction of>	leave London for India
b．	目的	<for the purpose of>	He arrived for dinner
c．	追求	<in pursuit of>	look for a job
d．	交換	<in exchange with>	I paid $500 for this book

e．代用・代表	<in place of>	used the ashtray for a paperweight
		Mary spoke for her class
		send a check for $500
f．理由	<because of>	he shouted for joy
g．利益	<for the benefit of>	sing for each other
h．賛成	<in support of>	I am for it
i．1対1	<by, at>	three for one
		word for word
		appointment for this afternoon
j．～として	<as>	mistake someone for somebody,
		blame the print for old
k．～の間	<throughout>	～ is so for months
l．記念して	<in celebrating>	name a child for the king, for the health
m．～にしては	<considering>	the weather is severe for this season
n．～に対して	<as "object">	responsible for
o．逆接	<for all>	for all I know
p．否定条件[6]	<if there is no ～ >	but for your help

以下，解説が必要なものに対して少し説明しておく。

Appointment for this afternoon が(12ｉ)＜1対1＞として分類されているのは，この用法は時間的なものではあるが，例えば *Appointment for two o´clock* と言えるように，(12ｋ)＜～の間＞と違ってこの用法には時間幅という概念が見られないからである。アポの時間を指定する言い方であり，アポの時間と指定された時間が一対一対応しているという考え方を本稿では取った。

(12m)＜～にしては＞は，(12ｊ)＜～として＞の亜種である。＜～として＞は同定(equation）である。例えば *mistake someone for somebody* では，someone = somebody と認識したということを言っている。(12m)の *the weather is severe for this season* では，severe であると叙述することによって，the weather = this season の同定が成り立たないことを主張している。

(12ｎ)＜～に対しては＞は，形容詞等の目的語を表示する用法である。後述するが，この用法は中英語期に失われた与格の代用であろうと考えられる。そのため，意味論的には「なぜ *for* が与格を代用できたのか」を考察することになる。

(12ｏ，ｐ)は，それぞれ all との組み合わせ，*but* との組み合わせのみで現れ，しかも両者とも文頭でしか用いられない。そのため，1節で議論した「慣用用法」の典型的なものである。よって，本研究においては，*for* の多義研究で重要な位置を占めることになる。

そして，(12)は，その方向性から，一見すると，次の4類と慣用表現にわけることができ

[6] (12ｐ)は収集した500例のうちにないものであるが，重要な用法であるため追加した。なおこの用法に筆者らが注意を向けたのは，日本英文学会中部支部大会（2005年10月）での宇納進一氏の指摘による。

る。すなわち，Ⅰ類としては，TR から LM への方向性が感じられるもの，Ⅱ類としては，LM から TR への方向性が感じられるもの，Ⅲ類としては，双方向の方向性が感じられるもの，Ⅳ類としては，動きが感じられないもの（そしてこの類に含まれるのは，慣用表現のみであることは注目に値する）。それぞれどの用法がどの類に属するかを示したのが(13)である。

(13) For の意味の分類

・Ⅰ類 ［TR から LM への方向性が感じられる］

a．方向	<in the direction of>	leave London for India
c．追求	<in pursuit of>	look for a job
g．利益	<for the benefit of>	sing for each other
h．賛成	<in support of>	I am for it
l．記念して	<in celebrating>	name a child for the king, for the health
n．～に対して	<as "object">	responsible for

・Ⅱ類 ［LM から TR への方向性が感じられる］

b．目的	<for the purpose of>	He arrived for dinner[7]
e．代用・代表	<in place of>	used the ashtray for a paperweight
		Mary spoke for her class
		send a check for $500
f．理由	<because of>	he shouted for joy

・Ⅲ類 ［TR と LM の間に双方向性が感じられる］

d．交換	<in exchange with>	I paid \500 for this book
i．1 対 1	<by, at>	three for one
		word for word
		appointment for this afternoon
j．～として	<as>	mistake someone for somebody,
		blame the print for old
m．～にしては	<considering>	the weather is severe for this season

・Ⅳ類 ［TR と LM の間に方向性が感じられない］

o．逆接	<for all>	for all I know
p．否定条件	<if there is no ～ >	but for your help

・その他

k．～の間	<throughout>	～ is so for months

各類を図示すると，以下のようになるであろう。

[7] 木下（1995）に従い，＜目的＞を［LM から TR への方向性が感じられる］とした。木下は，目的と理由は密接に結びついており，目的を，行動を起こす誘引としている。本稿の言葉で言えば，［目的］は TR → LM ではなく，LM → TR であるということになる。

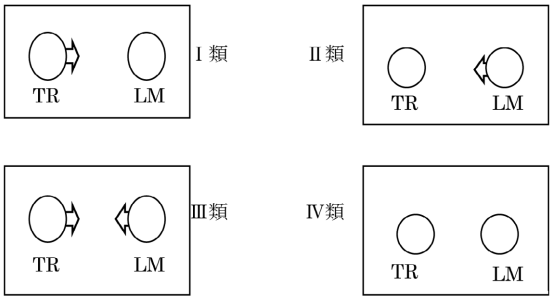

図１　Ⅰ～Ⅳ類のイメージスキーマ

そして，本稿では，Ⅲ類の，互いに向かっている方向性をもつものが，*for* の中心義であると主張する。

それぞれの類について，次項から，詳しく見ていくことにする。

3.2.　Ⅰ類　TR から LM への方向性が感じられるもの：*To* との比較

Ⅰ類は，TR から LM への方向性が感じられる用法であるが，TR から LM への一方向性を持つモノとしては，他には *to* があげられるであろう。よって，この節では，*to* と比較することにより，TR から LM への方向性を *for* が表す意義について考察する。

(13)のⅠ類の中で *to* と交換可能なのは，ａ，ｇである。

(13) a .　leave London for India
　　a '.　leave (go) to India
　　g .　sing for each other
　　g '.　sing to each other

それぞれの *to* の例文と *for* の例文を比べると，*for* の方が *to* の場合と比べて，LM からの働きかけがあるということであるのは明らかである。ｇの場合だと，(13ｇ')は相手が聞いていようと聞いていまいと歌っている状態を表すが，(13ｇ)においては，相手を喜ばそうとしている意図が感じられる。つまり *to* に比べると *for* の方が LM からの方向性があると言えるであろう。ａの場合も，(13ａ')は，目的地がインドであるということだけを告げるのにたいして，(13ａ)はインドに特別に興味をひくものがあってそのためにそちらに向かうという意味が強くなる。LM が無生物である場所であるからわかりにくいが，これを，*his house / him* などにすると，明らかに「彼」のために行くという意味が加わるのがわかる。*Him* にするとｂの用法になるという議論もできるかもしれないが，「彼のところ」というのを英語にするとなれば，*him*，*his place* とせざるを得ないことを考えると，ａとｂの用法は非常に近くて，意味を分類するのが難しいくらいに，同じような用法だと言えるであろう。

つまり，Ⅰ類を，*to* と比較しながら詳しくみると，Ⅰ類は TR から LM への動きを持ったモノであるわけであるが，この TR から LM への動きは，LM からの働きかけに呼応する動きであるわけである。つまり，一見すると一方的な方向性をもつⅠ類は，双方向的な方向性

をもつものの中で TR からの動きが注目されているものといえることができよう。

To ともう少し比較するために，次に与格交代構文を見てみる。(14)のような与格交替構文で，*to* が用いられる場合と *for* が用いられる場合とでは，意味に大きな違いがあることが知られている（Kuno and Takami（2004）やそこでの参照文献を参照)。

(14) a. John gave Mary some money.
b. John gave some money to Mary.
c. John bought Mary a doll.
d. John bought a doll for Mary.

To の場合には，直接目的語が *to* の目的語に到達することがほぼ含意される。一方，*for* の場合には，直接目的語が *for* の目的語に到達することまでは含意されないが，目的語に到達させるという意図の下に行為がなされることは含意される。更に，その行為は *for* 句の利益になるようにという意図がある。

「ほぼ」含意するとすぐ上で述べたのは，*to* で表しても到達を含意しない(15ｂ)の様な例文もあるからであるが，この例文であっても，*for* と比べると到達している可能性は高いと言えよう。

(15) a. *Send Chicago a parcel.
b. Send a parcel to Chicago.
c. Send a parcel for Chicago.

もう一つ例を出しておくなら，*for* は死者など到達することのない対象についても使うことができるのに対して，*to* は使えないということからも，*for* は，二重目的語構文・*to* 与格構文・*for* 与格構文のなかでは，最も到達を含意しないということがわかる。

(16) a. *Would you like to sing a song to late Mary?
b. Would you like to sing a song for late Mary? （森山他　2010：54）

For は *for* の句の利益になるように行為がなされる，つまり LM 句からの働きかけに応じて行為がなされることに関しては Goldberg（1995）でも同様のことが述べられている。

(17) a. Sally baked her sister a cake. （Goldberg　1995：141）
b. Sally baked a cake for her sister.

これらの２文において，(17 ａ)は *Sally* は姉（妹）がケーキを焼かなくてもいいように，つまり姉（妹）にあげるためではなくて，焼かないでいいようにといういみは表しえないと述べている。しかし，(17 ｂ)はそのような解釈も可能である。つまり *for* は，到達を含意せず，ＬＭからの働きかけに応じて行為を行なう，双方向性をもっているということがわかる。

まとめると，Ⅰ類の*for*は，一見すると，TRからLMへの方向性をもつもののように見えるが，*for*は到達を含意せず，むしろ，LMからの働きかけに応じてLMへ向かうという＜双方向性＞を表しているということが，*to*との比較からわかる。つまり，*for*のⅠ類の意味は，以下の図にまとめることができよう。

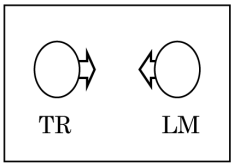

図２　*For*の中心義スキーマ

3.3.　Ⅱ類　LMからTRへの方向性をもつもの：*To*との比較

一方向的な方向性をもつものは，やはり*to*であるわけだが，このⅡ類に分類されている用法も，決してLMからTRの方向のみに方向性があるわけではなく，LMからTRへの方向性をプロファイルしながら，TRからLMへの方向性をも示唆するモノである。

これらは用例を見ると明らかである。

b．	目的	<for the purpose of>	He arrived for dinner[8]
e．	代用・代表	<in place of>	used the ashtray for a paperweight
			Mary spoke for her class
			send a check for $500
f．	理由	<because of>	he shouted for joy

bにおいて，LMである*dinner*はTRである*He*に働きかけているわけであるが，TRである*He*は*dinner*に移動しているわけであるし，eにおいても*check*は500ドルと対価であるわけなので，双方向といえる。Fにしても，彼は，叫んだわけであるので，ある種の方向性をだしていると言えよう。

つまり，Ⅱ類に属する用法もやはり，以下のイメージスキーマで説明することができよう。

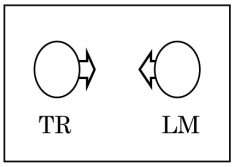

図２　Forの中心義スキーマ

[8] 木下（1995）に従い，［目的］を［LMからTRへの方向性が感じられる］とした。木下は，目的と理由は密接に結びついており，目的を，行動を起こす誘引としている。本稿の言葉で言えば，［目的］はTR→LMではなく，LM→TRであるということになる。しかし，この用法にLM→TR，TR→LMという両方の方向性があると感じるとするならば，それは本稿の議論をサポートすると言えよう。

3.4.　Ⅲ類　TR と LM の間に双方向性が感じられるもの：*As* との比較

２つの事物 TR と LM を並列するものとしては *for* にもっとも近い前置詞は *as* であると思われる。実際にⅢ類に含まれるものは，多少意味が変わるが（Iconicity からいうと当然の結果である），ほとんどのものが *as* に変更可能である。また，理由を表す接続詞としても二つの語が使えることからも，この２語の近接性を見ることができる。（ただし，本稿は前置詞 *for* を考察するので，接続詞 *for* については稿を改めることとする）

d．　交換	<in exchange with>	I paid $500 for this book
d ′.		I paid $500 as the price of this book
i．　１対１	<by, at>	three for one
i ′.		three as one
j．　～として	<as>	mistake someone for somebody,
		blame the print for old
j ′.		mistake someone as somebody
m．～にしては	<considering>	the weather is severe for this season
m ′.		the weather is sever as this season

では，*for* と *as* では何が違うかというと，*for* は *as* に比べて方向性を強くもつというのが本稿の主張である。例えば(16ｄ′)は，TR と LM を並列してそれを比較しているにすぎないが（だから *the price* を入れて何を比較するのかを表さなくては自然な文にならないのであろう），(13ｄ)は本の「ために」500ドルを払う，500ドルと交換する「ために」本を出すという双方向性を持っていると言えよう，また，ｊにしても，*as* の方が動的な読みが少ない。実際に，ｉの例でいうなら，*three for one* と *three as one* の前に使われている動詞がどんなものであるかを調べて見ると，*for* の方が *exchange* など動的な動詞が多く使われていた。

やはり，Ⅲ類をみても，for は TR から LM への双方向的な方向性が感じられると言え，図２のようにイメージスキーマを設定できると言えよう。

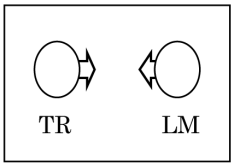

図２　*For* の中心義スキーマ

3.5.　Ⅳ類　TR と LM の間に動きが感じられないもの

本稿は，*for* の意味は，TR と LM の双方向の方向性をもったものと主張するわけであるが，その場合，Ⅳ類の説明が一見すると難しそうである。 しかし，これらの用法は，詳しく見てみると，決まり文句であり，on-line meaning construction を考慮に入れれば，TR と LM の双方向性によって説明できる。例えばｐに至っては，ｆの亜種とも言えよう。（この用法は *with* に言い換えられることができることからわかるように，*with* が最も近似義語と言え

るが，*with* との比較については，次章で詳しくみることにする。）

・Ⅳ類 ［TR と LM の間に方向性が感じられない］

o．	逆接	<for all>	for all I know
p．	否定条件	<if there is no ～ >	but for your help
cf. f．	理由	<because of>	he shouted for joy

p の意味は，否定条件とあるが，その否定の意味をもつのは *but* であって，*for* がもつのは，「～があれば」の意味である。この場合，*your help* が存在するだけではなくて，私の方に *your help* が向いていてくれればという方向性を表すと言えよう。

また，o も，「私が知っていること」と実際に起こっていることを比較，つまり 2 者が対峙していることを表す意味だと言えよう。これは，ただ 2 者が並列されているだけではなく，つまり，同じ空間に 2 つを並べて 2 つがばらばらな方向を向いているというわけではなく，積極的にお互いに向き合い対峙するという意味で，やはり，両者が対峙しているという方向性が感じられるのである。

つまり，一見すると，TR と LM の間に動きがないように感じられるⅣ類も，やはり，*for* がもつのは，TR と LM の 2 つの双方向性を表すと言え，この類もまた，以下の図で示すことができる。

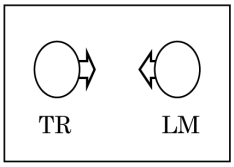

図 2　*For* の中心義スキーマ

本章では，TR と LM の間に感じられる 4 つの動きの種類によって，すなわち Ⅰ類：TR→LM，Ⅱ類：LM→TR，Ⅲ類：双方向，Ⅳ類：動きが感じられないという，一見すると 4 分類できる *for* の様々な意味も，詳しく見ていけば，すべて，TR と LM からの双方向の方向性ということにまとめられるということを見てきた。

次章では，このように中心義を設定すると，本稿が呼ぶところの「孤立用法」そして「慣用用法」が説明できることを通して，また，史的に *for* の発展と近似義語との棲み分けを見ることによって，本論の主張をサポートすることにする。

4．サポート

4. 1. 孤立用法：＜～の間＞

この用法は，多くの先行研究においては，「決まり文句」として片付けられ扱われないことが多い。本稿は，特定の単語との組み合わせのみで現れるというわけではないので生産的

ではあるけれども，他の用法とは関連付けられない用法は「孤立用法」と呼び，次節にでてくる「慣用表現」とあわせて，これらの用法こそが全用法の関連を示すミッシングリンクとなり得る可能性が高いために，注目して説明されなくてはならないという立場をとっている。この用法は，上記の意味において「孤立用法」と呼ぶことができるが，３章であげたようなスキーマを *for* に認めれば，問題なく説明することができる。

この用法を扱った数少ない先行研究として，加藤＆花崎（2006）があげられようが，その論では，すべての用法をみる必要性を説き，この用法を扱おうとし，OED の記述を参考に以下のように議論した[9]。

（18）「～の間」導入の説明

a．*Pour* と *for* は「ために」という意味を持つ点で共通している

b．*Pour* には「TR の動き」という特徴を持つ「～の間」という用法があったが，*for* には「向き」しかなかった

c．与格交替構文で *for* が用いられるようになったことにより，*for* の「向き」に「TR の動き」の概念が導入された

d．「向き」しかなかった *for* に「TR の動き」が導入されたため，「について」の共通性を基盤とする pour = for の図式が強化され，「TR の動き」においても共通点を持つに至った。

e．*For* への「TR の動き」の導入により，「TR の動き」を持つ *pour* の「～の間」を *for* が取り入れることが可能になった。

この用法の初出が OED によると，フランス語が多く英語に流入してきた1066年以降の，1450年の以下の用例であることを考えれば，一見，妥当のように見える。

（19） c1450 Cov. Myst. 129 Who setyth oure ladyes sawtere dayly for a ȝer thus.

しかしながら，１章の始めでも述べたとおり，どうして *pour* の意味の中で，この「～の間」の意味用法のみが *for* に付与されたのか，説明できない。

この用法は，以下の図のように *for* の中心義を設定すれば，問題なく説明できよう。

---

[9] 加藤＆花崎（2004）では以下のように議論した。

a．*Pour* と *for* は「ために」という意味を持つ点で共通している

b．*pour* には「～の間」の意味がある。

c．「向き」しかなかった *for* に [方向] が導入されたため，「ために」の共通性を基盤とする *pour* = *for* の図式が強化され，「方向性」においても共通点を持つに至った。

d．*For* への「方向性」の導入により，「方向性」を持つ *pour* の「～の間」を *for* が取り入れることが可能になった。

しかし，加藤＆花崎（2005）でそれを否定し，(18)のように議論するに至った。

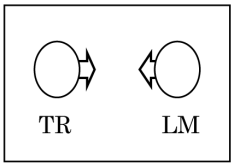

図２　*For* の中心義スキーマ

つまり，２つのものが互いへの方向性をもっているということで，＜～の間＞という意味をもつことができると論じれば，これは簡単にこの中心義のイメージスキーマで説明できるのである。

4.2. 慣用用法

次に慣用用法を考察する。本研究プログラムにおいては，孤立用法と並んで，慣用用法こそが，意味ネットワークを考える際の重要な手がかりをもっているために，慣用表現を，先行研究がよくしているように「例外」として扱わないということはできないとしている。つまり，本稿が提案する，孤立した用法説明を起点とした研究プログラムは，孤立した用法は，ある特定の単語の組み合わせや特定の文中での位置でしか使用されない「慣用用法」である可能性がある。そのような用法は，「失われた用法」への手がかりとなるかもしれないという点で実は重要なものであるかもしれない，ということを提案するものである。

For でこの慣用用法に当てはまるのは(13)のⅣ類であるが，それらは，2.4で見たとおり，一見すると TR と LM の間に動きがないように感じるが，この類に含まれるものも，TR と LM への双方向性，つまり，図２で示すことができると述べた。

・Ⅳ類　［TR と LM の間に方向性が感じられない］

o．	逆接	<for all>	for all I know
p．	否定条件	<if there is no ～ >	but for your help

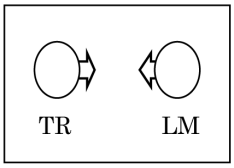

図２　*For* の中心義スキーマ

では，次に，Ⅳ類がなぜ生産的なものではなく，熟語用法としてしか生き残っていない理由を考察する。図１のⅣ類のイメージスキーマは，実は現代英語における *with* と同じである。*With* の意味は概略「TR と LM が場において共にある」というものであろう。そのイメージスキーマは図ⅠのⅣ類と同じになるはずである。実際に，この類に含まれる用法は，意味は Iconicity の観点から考えても全く同じとは言えないが，すべて，同じような用法で *with* に置き換えが可能である。

さてここで確認しておきたい点が２点あるが，１点目は，OED によると，Ⅳ類は古英語

期からある用法ではあるが，古英語期には *with* には「いっしょに」の意味はなく（cf. OED with 22 a），「いっしょに」の意味は *mid* が表していた。また，２点目として，*for all*，*but for* のいずれも，ただの付帯状況ではなく譲歩的・否定的な付帯状況の意味を持つという点である。これは現代英語だけの状況ではなく，古英語時代からそうであった。(20)はこれらの意味に対する OED の定義であり，そこでは否定的な意味であることをはっきり示されている。

（20） 23. Of a preventive cause or obstacle.

a . In spite of, notwithstanding. Rare exc. in *for all*, *any*, with a n.; also absol. *for all that*, etc. （中略）

c . Indicating the presence or operation of an obstacle or hindrance. (Cf. ON. *fyrer*, Ger. *für*, *vor*.) In negative sentences; also after *if it were not*, *were it not*; occas. = for fear of.

† *for to die for it* = if I die for it. *but for*: see but C. 29.

Mid は，現代英語の *with* と同様に付帯状況の用法もあった。しかし Bosworth and Toller（1898，mid，VII）を見る限り，*without* が持つような否定性は見られなかったようである。これは *with* は *without* という否定形を持つが，一方 *mid* にはそのような否定形がなかったことを考えれば当然のことであろう[10]。このように，同じく付帯状況の用法を持ちながらも，mid とⅣ類は役割分担をしていることになり，よって *mid*，および *mid* が消失したあとは *for* と同じイメージスキーマをもつ *with* がⅣ類派生の阻止要因となったと考えられる。Ⅳ類はイメージスキーマのレベルで競合する前置詞があったため，熟語としてしか生き残ることができなかった，というのが本稿のⅣ類に関する結論である

4. 3. *For* の古英語期からの通観と *For* に対する Onomasiological Approach

(12)の *for* の諸用法は(13)のように分類されるわけであるが，その中で古英語期からある用法を囲み文字にしたものが(21)である。それ以外は，中英語期かそれ以降に出現した意味である。なお，出現時期に関する情報は全てOEDに拠っている。この史的に *for* の用法を通観し，かつ本稿が提唱する（４）の具体的な方法論でも述べられている Onomasiological な視

[10] *For all* を本文中で「譲歩的」付帯状況を示すと述べた。現代英語において，*with* が同じように譲歩的付帯状況を表し得ることを考えると，本稿の主張は危ういものに見えるかもしれない。しかし，*For all* の持つ「譲歩」の意味は，(19)の OED の定義が示すようにこの熟語自体が持っている意味であり，その証拠に *for all* が肯定的付帯状況を示すことはない。一方，*with* においては肯定的付帯状況を当然ながら表すことができる。この点から，*with* の譲歩と *for all* の譲歩は質的に違うものであるということが言える。具体的には，*for all* の譲歩と違って *with* の譲歩の意味は，*with* 自体が持つものではなく，聞き手が語用論的に読み込むものであると考えられる。譲歩を含め，分詞構文の持つさまざまな「意味」は実は分詞構文が持つ意味ではなく，日本語のテ接続やゼロ接続文（「飲みすぎて，翌日気持ち悪かった」／「飲みすぎた。翌日気持ち悪かった」等）と同様に，構文がそのような意味を持つのではなく，会話当事者によって読み込まれるものであるという筆者らの主張については，加藤・花崎（2003）を参照されたい。その議論は，*with* の譲歩に対しても有効である。

点で意味の拡張を阻止する動的な視点を考えても，＜双方向性＞を中心義とすることがサポートされる。

(21)　For の意味の分類

・Ⅰ類　［TR から LM への方向性が感じられる］

a．	方向	<in the direction of>	leave London for India
c．	追求	<in pursuit of>	look for a job
g．	利益	<for the benefit of>	sing for each other
h．	賛成	<in support of>	I am for it
l．	記念して	<in celebrating>	name a child for the king, for the health
n．	～に対して	<as "object">	responsible for

・Ⅱ類　［LM から TR への方向性が感じられる］

b．	目的	<for the purpose of>	He arrived for dinner
e．	代用・代表	<in place of>	used the ashtray for a paperweight
			Mary spoke for her class
			send a check for $500
f．	理由	<because of>	he shouted for joy

・Ⅲ類　［TR と LM の間に双方向性が感じられる］

d．	交換	<in exchange with>	I paid \500 for this book
i．	1対1	<by, at>	three for one
			word for word
			appointment for this afternoon
j．	～として	<as>	mistake someone for somebody,
			blame the print for old
m．	～にしては	<considering>	the weather is severe for this season

・Ⅳ類　［TR と LM の間に方向性が感じられない］

o．	逆接	<for all>	for all I know
p．	否定条件	<if there is no ～ >	but for your help

・その他

k．	～の間	<throughout>	～ is so for months

(21)を見ていて気づくのは次の 2 点である。

(22)　a．Ⅰ類からⅣ類まで，すべての類が，すでに古英語期からあった。

b．中英語期から増えているものは，Ⅰ類に集中しており，それも，＜方向＞＜追求＞＜記念して＞＜～に対して＞という，TR から LM への一方的な動きに注目した意味が増えている

4. 3. 1. *For* の史的通観

For は現代英語において驚くべき多義性を持っているが，(22 a)の観察は，その多義性が多かれ少なかれすでに古英語期からあったことを示している。＜双方向性＞という中心義を導入すれば，これらすべての意味を包括できるといえよう。

多くの先行研究は，＜前＞が中心義であるとしているが，認知言語学の多義研究に従い，中心義を中心に意味はメタファーやメトニミーによって拡張するとするなら，古英語期には＜前＞のみの意味があり，その後＜目的＞等の他の意味が増えたという説明であれば，＜前＞を中心義であるとする議論は妥当だと言えよう。しかし，(21)が示すとおり，他の意味も古英語期からあるのが事実であるわけなので，それらのどれかを中心義に据えるより，すべてを説明することができる＜双方向性＞が中心義であるとする本稿の主張の方が妥当であると言えよう。

4. 3. 2. Onomasiological な説明：*before* との比較

また，Onomasiologicaly に考えても，＜双方向性＞を中心義に据える妥当性を見ることができる。

複数の語の意味が，近似義語として重なりあう場合，重なり合った意味を独立させ，その意味であることを明らかにするために，同じような意味のことばを重ね，棲み分けることがある。例えば，花崎（2006），Hanazaki and Hanazaki（2008），花崎＆花崎（2009）で明らかにした通り，*in* と *on* が棲み分けを行う際は，上を表す意味は，「上」を表す語を重ね，*upon* とすることによって棲み分け，また，*to* と *till* が棲み分ける際にも，「～までずっと」を表す *un* と *till* を重ね，*until* とすることによって「～までずっと」という意味が棲み分けられた[11]。

その様な意味で，*for* は，*before* と棲み分けたと仮定できる，古英語期には，＜前＞の意味だけを持つ *beforan* がすでに用いられていた。*Beforan* は概略 *be*（=by）を *for* に付けたものである。すでに見たように，Hanazaki and Kato（2003，2004）では，古英語期の *by* の中心義を空間的意味である＜辺り＞であると論じている。＜双方向性＞を表す *for* に，空間的な静的な意味を持つ *by* を付けて「前」という意味が棲み分けられたと想像することができよう。

もし，「前」を *for* の中心義とするなら，どうして，その中心的な意味に *by* をつけて *before* を作り出さなくてはならなかったのかが説明できない。次節で説明する通り，「前」の静的な空間意義を *before* と棲み分け，＜双方向性＞の中心義の中でも，TR から LM への方向性の意味を強調するように *for* は意味拡張をしていったと考える本稿の議論の方が妥当性があると言えるであろう。

4. 3. 3. ＜方向＞等への意味の拡張

(22 b)で見たとおり，中英語期以降に *for* が持つようになった意味は，＜方向＞＜追求＞

---

[11] 古英語期における *till* のスペルは *til* だったために，古英語期にできた *until* のスペルは l が 1 つなのである。詳しくは花崎＆花崎（2009）などを参照。

＜記念して＞＜～に対して＞という，TR から LM への一方的な方向性に焦点をあてた意味が増えている。このことからも，＜双方向性＞を中心義に設定する妥当性をみることができる。

よく知られているように，中英語期に名詞の与格語尾が消失した。それを補うため，二つの前置詞が与格の代用として用いられた。一つは *to* であり，もう一つは *for* である。

なぜ与格語尾の代用として *for* が用いられたのかは，*for* が＜双方向性＞という意味が中心義であったからであると考えれば簡単に説明が付くことである。与格交替構文は，(14)で見たように，直接目的語の移動という概念が明瞭である。そしてこの移動という明確な概念を表す与格語尾のかわりに *for* が選ばれた理由として，*for* が＜双方向性＞という【方向性】を持っていたからであるというのが本稿の説明である。

一言，どうして，与格語尾という 1 つの用法を，*to* と *for* という 2 語が担い得たのか，を付け加えておくとするなら，Iconicity から考えて *to* と *for* が，一方向性と双方向性という意味の棲み分けが行われているからであるからであると考えることは妥当であろう。このことからも，*for* の意味を＜双方向性＞と設定することをサポートできる。

最後に，移動の概念を最も明瞭に示す＜方向＞ *start for Tokyo* の用法を考えよう。OED によれば，この用法の初例は次のものである。

(23) Indicating destination. Cf. Fr. pour.
c1489 Caxton Sonnes of Aymon i. 36 She asked whi they were departed for the kynges courte. (OED, for 12.)

ここで興味深いのは，OED がこの用法について「フランス語の *pour* を参照」としている点である。*pour* 自体が *for* と同語源であり，かつ，中英語期は，フランス語の影響を大きく受けた時期である。*Pour* の基本的な意味は「ために」であり，＜双方向性＞という中心義を持っている *for* が＜前＞という意味を *before* と棲み分け，TR から LM への方向を注目するよう，意味拡張していったと考えるなら，このような＜方向＞という意味を受け入れる素地があったと考えるのは自然である。この事実からも，＜双方向性＞を *for* の中心義と設定することがサポートされうると言えよう。

5．結論

以上の主張をまとめる。

(24) 本稿の主張
a．多義研究は，孤立用法や慣用用法を含むすべての意味用法を包括的に扱わないといけない
b．孤立用法や慣用用法は，「失われた用法」への手がかりとなるかもしれないという点で，実はとても重要である。
c．多義研究においては，際限ない意味の拡張を防ぐためのシステムとして，

Onomasiological な視点も必要である。

d．*For* において，すべての用法を bottom-to-top で検証した結果，*for* の中心義は＜双方向性＞であると言える。

e．「孤立用法」である＜～の間＞は，＜双方向性＞から導き出すことができ，＜～の間＞の用法を説明するためには，TR からの方向だけでなく，LM からの方向を含意する＜双方向性＞という概念が必要である。

f．熟語用法 *for all*，*but for* は同じイメージスキーマを持つ *mid*（後に *with*）により阻止されたため生産性を獲得できなかったため，熟語としてしか生き残れなかった。

参考文献

Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.

ブレント・デ・ション（1997）『英文法の再発見』東京：研究社.

Brugman, Claudia (1981) "Story of *over*" Master thesis. University of California, Berkeley.

-------- (1988) *The Story of* Over: *Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon* (Outstanding Dissertations in Linguistics). New York: Garland.

Burigo, Michele and Lenny Coventry (2005) "Reference Frame Conflict on Assigning Direction to Space" *Lecture Notes in Computer Science* Vol.3343. pp. 111-123.

Conventry, Kenny R., Angelo Cangelosi. Rohanna Rajapakse, Allison Bacon, Stephen Newstead, Dan Joyce, and Lynn V. Richards (2005) "Spatial Prepositions and Vague Quantifiers: Implementing the Functional Geometric Framework" *Lecture Notes in Computer Science*. Vol. 3343. pp. 98-110.

Dirven, R and M. Verspoor (2003 [1998]) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Farrell, Patrick (2005) "English Verb-preposition constructions: constituency and order" *Language*. Vol. 81(1). pp.96-137.

Givon, Talmy (1984) *Syntax*: *A Functional-typological Introduction*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Gold berg, Adele E, (1995) *Constiuctions: A Construction grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Hanazaki, Miki (2005) "Toward a Model of Principled Polysemy" *English Linguistics*. Vol.22 (2).pp.412-442.

花崎美紀（2006）「「上」を表す前置詞の多義と棲み分け」 日本英語学会　口頭発表.

花崎美紀，花崎一夫（2009）「上を表す前置詞 *Upon/on* そして *In* の意味論」『人文紀要文科学論集（文化コミュニケーション学科編）』 Vol.43. pp.61−69.

Hanazaki, Miki and Kazuo Hanazaki (2008) "The Semantics of *Till / Until / To* & *On / Upon /In*" Oral Presentation made at ELSJ International Spring Forum.

Hanazaki, Miki and Kozo Kato (2004a) "The Semantic Network of *By* (2)" *Studies in Humanities*: *Culture and Communication*. Vol.38. Shinshu University. pp. 23-38.

-------- (2004b) "The Semantic Network of *By*" in *Studies in Modern English*: *the Twentieth Anniversary Publication of Modern English Association of Japan*. Tokyo: Eicho-sha. pp. 337-352.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hunnemeyer (1991) *Grammaticalization*: *A Conceptual Framework*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Hill, L. A. (1969) *Exercises on Prepositions and Adverbial Particles*. London: Oxford U.P.

木下浩利（1995）「英語前置詞 FOR の意味構造　－仮説の試み－」『筑紫女学園大学紀要』 Vol. 7 . pp.139−150.

Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.
加藤鉱三，花崎美紀（2005）「For の意味論」日本英文学会中部支部大会口頭発表.
--------（2006）「For の意味論」『人文科学論集，文化コミュニケーション学科編＞』 Vol.40. pp.59–78.
Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (2004) *Functional Constraints in Grammar on the Unergative-Unaccusative Distinction*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 1: Theoretical Prerequisites. Stanford: Stanford University Press.
Lindstromberg, Seth (1997, 1998) *English Preposition Explained*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
松原史典（1999）「補文標識か，前置詞か　－ for / to / of の統語的振る舞いについて－」『英語教育』 Vol.48–10. pp.49–52.
宮前一廣（1998）『前置詞の文法』東京：松伯社 .
森山智浩　他（2010）『英語前置詞の概念－認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から－』 名古屋：ブイツーソリューション .
中右実（1994）『認知意味論の原理』 東京：大修館 .
大西泰斗 , ポール・マクベイ（2005[1996]）『ネイティブスピーカーの前置詞』東京：研究社 .
Rauh, Gisa (2002) "Prepositions, Features and Projections" in *Prespectives on Prepositions*. eds. Hubert Cuyckens and Günter Radden. Niemeyer: Tubingen. pp.3-24.
田口瑞貴（2004）「与格交替における前置詞 To と For の選択について」『桜美林レヴュー』 Vol.28. pp.29–42.
高木道信（1997）「＜ for ＋数表示金額＞型と＜ at ＋量表示価格＞型における前置詞の互換性（Ⅰ）」『千葉商大紀要』 Vol.35–3. pp.19–44.
----- （1999）「＜ for ＋数表示金額＞型と＜ at ＋量表示価格＞型における前置詞の互換性（Ⅱ）」『千葉商大紀要』Vol.37–1. pp.57–99.
Taylor, John (1993) "Prepositions: Patterns of polysemization and strategies of disambiguation" in *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. ed. Cornelia Zelinsky-Wibbelt. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. pp. 151-175.
Thora, Tenbrink (2005) "Identifying Objects on the Basis of Spatial Contrast: An Empirical Study" *Lecture Notes in Computer Science*. Vol. 3343. pp.124-146.
Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.
Yamaguchi, Kazuyuki (2002) "Is English Really Unique among Languages of the World: A Typological Study with Special Attention to the English Preposition FOR" *Bull. of Nippon Sport Science*. Vol. 32-1. pp.67-79.
Wood, Fredrick T. (1967) *English Prepositional Idioms*. London: Macmillan.
Wittgenstein, R. (1953) *Philosophical Investigations*. Cambridge, MA: Blackwell.

データ
Cobuild English Dictionary for Advanced Learners.
Kenkyusha's English-Japanese Dictionary for the General Reader
British National Corpus
Corpus of Contemporary American English

（2011年10月30日受理，11月30日掲載承認）